

---

# じんけん ぶんか まちづくり

一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会

---

第 55 号 (2017 年 4 月)



じんけん ぶんか まちづくり第 55 号

---

## 2017 年度賛助会員を募集しています

「協会」をささえていただくサポーターです。部落差別とは何か？どうしたらなくすことができるのか？関心や興味を呼び起こし、多様な意見交換を通じて刺激しあい、学びあい、問題意識が触発され、行動への契機が実る場を創り出すために、知恵と力をお貸しください。年4回発行予定の機関誌「じんけん ぶんか まちづくり」をお届けします（今までお届けしている方は、これまでどおりお届けします）。また、講座やイベントなどの案内をします。

●年会費 1口・1000円です。下記の郵便振替口座に振り込んでください。  
口座名：とよなか人権文化まちづくり協会 口座番号：00960-8-153806

## 人権相談をご利用ください

### 1. 人権ケースワーク事業（豊中市からの受託事業）

#### ●定例相談

とき：月曜・水曜・金曜日の9時～17時

ところ：蛭池事務所（蛭池人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-2315 mail：bpazk307@tcct.zaq.ne.jp

#### ●出張相談

とき：毎月第2・第4木曜日の13時～15時

ところ：豊中市役所第2庁舎1階市民相談課

### 2. 人権相談（自主事業）

とき：月曜日～土曜日、事務所開設時（9時～17時）に随時受付

ところ：豊中事務所（豊中人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-5300 mail：bwz37306@nifty.com

#### ●編集：発行

一般財団法人

### とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北3-13-7 豊中人権まちづくりセンター内

TEL：06(6841)5300 FAX：06(6841)6655

HP： <http://jinken.la.cocan.jp/>

E MAIL： [bwz37306@nifty.com](mailto:bwz37306@nifty.com) 郵便振替：00960-8-153806

蛭池事務所 TEL:06(6841)2315 E MAIL:[bpazk307@tcct.zaq.ne.jp](mailto:bpazk307@tcct.zaq.ne.jp)

## 編集後記

◇向井さんとは直接お話する機会はありませんでしたが、何度か豊中に来ていただき、部落解放運動の在り方や寺本知さんとのエピソードについて語ってもらった際の印象は事務局長が書いたように、まさに誠実そのものの人でした。今の僕らの暮らしがあるのは、向井さんのような部落の大先輩のおかげだと思います。◇林さんの「理解を深める努力をせず切り捨てて前に進んでも、客車を切り離して進む機関車のようなものである」といった例えの部分は、自分の中でストーンと落ちた感じがしました。部落問題についても「相手に伝える」のではなく「伝わる」ことが大事で、「どうして理解してくれないのか」ではなく「どうすれば理解してもらえるのか」について考え、丁寧に具体的に啓発していかなければならないと改めて思いました。◇今に始まったことではないかもしれませんが、安倍さんや橋下さんといった権威的な人に同調・迎合し、異を唱える者や弱者・少数者を潰しにかかるといった動きがあちこちで見られ、大変気がかりに思います。また、こうした状況の中、まるで戦争の準備をしているかのような法整備がどんどん進められているようですが、果たして日本はどのような国をめざしているのでしょうか。この先「こんなはずではなかった」となるような時代が来なければ良いのですが……。◇相模原で起こった障害者施設殺傷

事件は大変ショッキングでしたが、まるで容疑者の精神疾患が事件の原因であるかのような印象をあたえ、障害当事者への二次被害にもつながりかねない当時のテレビ報道には僕自身も違和感を覚えました。あの事件は容疑者の「障害者なんていなくなればいい」といった差別思想が動機になって起こった事件です。こうした差別思想は精神疾患によって引き起こされるものではありません。◇楽遊ガイドでは蒼国来関の続報について知ることができました。八百長への加担という謂れなき汚名を晴らただけでなく、2年間のブランクと33歳という年齢のハンデを見事に乗り越えて復活を果たした不撓不屈の力士・蒼国来関の今後に注目していきたいと思えます。◇今回、初めて協会機関誌の編集・発行に携わりました。編集ソフト自体は使い慣れていたものの、原稿やページの多さに苦戦しました。ちなみに一番苦戦したのはこの編集後記です(笑)お忙しい中、原稿執筆に協力してくださった理事・評議員の皆さん、ありがとうございました。(重本)



## もくじ

○巻頭コラム「追悼！向井正さん」	3
○理事のページ「新たな施策は、丁寧に・具体的に・理解を深める議論を大事に」	6
○理事のページ「権威主義的になりつつある今の世に思う」	8
○評議員のページ「相模原障害者殺傷事件に思う」	10
○楽遊ガイド「蒼国来関！おめでとう！！初金星！！」	12
○報告「人権啓発研究集会 in 名古屋」	13
○報告「ふしぎな部落問題」	14
○報告「リバティおおさか裁判第8回口頭弁論」	16
○書評「二十歳の原点」	18
○新聞切り抜き帖から「ウルトラセブンのシナリオに込められた想いを知る！」	18
○豊中地域から「保育教育協議会」	20
○蛭池地域から「新年度がスタートしました！」	22
○編集後記	23

## 表紙の写真「出雲阿国のお墓」

歌舞伎の創始者・出雲阿国（いづものおくに）は出生等を含め謎が多い（1572年～没年不詳）。正月に出雲を訪れたとき、駅売店に「出雲阿国」のお菓子があるのを見て、観光案内所で聞いて「阿国めぐり」をした。

満員の臨時バスで出雲大社に。手前で降ろされ、周りを見回すと、高浜川にかかる橋の手前に建っている阿国像が目に入る。四条大橋にあるものと同じ塑像から作られたようだ。

次のポイントは「阿国の墓」。暖かいこともあってか、参道は人波がうねっている。神社を前に左にカーブする道を行くと看板が見えてきた。お墓は階段を上り切ったところにあった。奥には実家のお墓もあり、傍らには木の実ナナが阿国のミュージカルをした時の記念碑も。

さらに西へ向かうと、奉納山の頂上の途中に出雲阿国を顕彰した塔があるようだが割愛する。道を引き返しながら地図を

見ると、余生を過ごした阿国寺「連歌庵」があるようだ。入口に説明版と大きな木彫りの像があり、庵はこじんまりしていた。時間つぶしを兼ねて立ち寄った出雲だが、阿国と出会えるとは望外の喜びだった。

ところで、歌舞伎役者は今でこそ華やかにスポットライトを浴びているが、当時、世間では「河原者」と呼ばれる被差別民で、江戸では穢多頭・弾左衛門の支配下にあった。しかし、1708年に京都の傀儡師（くぐつし）が弾左衛門が興行を妨害したと江戸町奉行に提訴し、弾左衛門が敗訴（「勝扇子」（かちおおぎ）事件）し、弾左衛門の支配から脱する。これを題材にして2代目市川團十郎1713年に上演したのが歌舞伎18番「助六」で、悪役として登場する「髭の意休」のモデルが4代目弾左衛門集久だと言われる。何とも複雑な思いにとらわれる。

（佐佐木寛治）

## 巻頭コラム

**静かで誠実だが、人一倍熱い心で部落問題を見つめ続けていた向井さん。まだまだ話すことがあったのに・・・**

**佐佐木 寛治（事務局長）**



3月10日、自宅で職場のメールチェックをすると、大賀さんから「元大阪府連書記長、元中央執行委員の向井正さんが2月26日死去されました。完全家族葬で、私も3月7日に知りました。偲ぶ会等はしないそうです。」とのメール・・・

驚くと同時に一抹の悔いの念が湧き上がりました。そして、今年の年賀状を改めて取り出し、向井さんからは来ていなかったこと、さらに去年の手帳をめくり、最後に会ったのが、2106年1月13日だったことを確認しました。ここ数年、向井さんとは年に数回お会いし、世間話をしていました。しばらく連絡がないなあと感じになり、もしや体調が良くないのではと案じていました。

向井さんが激務の中、過労と心労がピークに達して病に倒れたのが1985年8月で、一命をとりとめました。糖尿病を患い、厳しい自己節制の日々を余

儀なくされました。そんな折、向井さんとの関係をつくるきっかけになったのは、11年前に起きた「飛鳥会事件」でした。

心ある多くの人々が怒りと哀しみを胸に苦しみ、もがきました。事件を考える場をということで、当協会が「部落問題は今、研究会」で取り上げ、向井さんにも2006年3月20日に「部落解放運動を見つめ続けて思うこと」というテーマで話していただきました。その後、部落解放同盟豊中支部第41回定期大会（2007年7月1日）と「寺本知生誕100年のつどい」（2013年10月6日）で記念講演もしていただきました。

そうしたことが縁となって、時たまお会いする機会を持ちました。最初の頃は、岡町の「ドラム」まで来ておられましたが、それも難しくなって、梅田の喫茶店で待ち合わせをするようにしました。病魔に侵されて体が衰えていきつつも、部落解



## 蛭池地域から

### 新年度がスタートしました！ 福島 智子（事務局）

あっという間の1年が過ぎ、新たな1年がスタートしました。

改めて1年を振り返ると、地域での様々な事業1つ1つによって、今後の課題等が整理できたものと、でききれていないものがあるように思います。私個人としては、全体的にでききれていない反省の方が多く感じています。

地域の中での取り組みは、たくさんの関係団体との協働した取り組みが多いので、その関係団体との関係ができないと協働は難しくなります。関係団体が多ければ多いほど協働した事業は本当に難しいと思います。特に部落問題をはじめ様々な差別の問題と人権を中心軸に置くという事は、当たり前になってこそ普通なのですが、そこが本当に難しいところです。

公的機関は、年度替わりと共に、人事異動の時期でもあり、関係ができてきたと思える頃には異動の時期になります。寂しい反面、異動になった先で、差別のおかしさや人権問題について、発信してもらい、広がりのお機会でもあります。

事業によって発信の仕方は違っても、運営する側は、中心軸をしっかり持って運営していけるように、お互いの人権感覚を磨きながら、取り組んでいきたいと思っています。



常設パネル展

## 部落問題は今…

～Q&Aと事例紹介～

部落問題についての疑問や質問をQ&A形式にて紹介する他、近年発覚した差別事件の事例について紹介しています。無料で見学できますので、ぜひ、お越しください。

時間：月曜～土曜日 午前9時～午後5時

（日曜・祝日、他のパネル展開催時を除く）

会場：豊中人権まちづくりセンター 2階

開催中

互いに思い共有したり交流しあうことで、つながりをつくるとともに、部落問題をタブーにせず、それを軸にした取り組みをつくっていくことをめざしています。

2016年度の1回目（7月14日）では、インターネット上での部落地名公開事件も含めた部落差別の現状についての報告と、また、その現実に対してどう思うかを重本と酒井で話しました。

2回目（12月20日）は、「今まで出逢った子どもたちが教えてくれたこと」と題して、克明小学校の石井隆一先生から今まで出会った子どもたちとのエピソードについての話を聞きました。

3回目（3月23日）は豊中人権まちづくりセンターこども園の直原育代先生と豊中第五中学校の末永貴洋先生と濱田真羽先生に、こども園や学校で取り組んでいることについての話をしてもらいました。

計3回の集まりをとおして、参加した先生方などからたくさんの感想をいただいたので、その一部をここで紹介したいと思います。

- ・正しいことをきっちり知るためにここに来てよかったです。いつも一緒に考えていきたいと思います

- ・人と人との関係がとても大切ということを改めて感じた。その前に、今何をすべきか、何にこだわるのかを考える機会となりました。

- ・否定しない、流さなということ。人として温かい関係を作って、温かなつ



ながりを作っていくことが大事だなと思います。認められる、自分のことを大切にされる中で育ちがあるんだなと思いました。人を大切にしていける感性をもって日々過ごしていきたいと思います。

- ・とても勇気ができました。部落差別の事を、みなさん本当に真剣に考えていて感動しました。これからはずっと“関係者”でいたいです。

- ・私は今日で最後の保育教になると思いますが、五中で働かせてもらってから数年間で、人権について生きてきた年数以上の学びを得ることが出来たと思います。本当に勉強になりました。ありがとうございました。これから違う場所で子どもたちと関わっていく中で、ここで学んだことを生かして、いろいろなことを伝えていきたいと思います。

人事異動などの関係で、こども園や小・中学校では、人の入れ替わりが激しい状況にありますが、新たな出会いもたくさんあります。これからは保育教育協議会をとおして、こつこつ丁寧に関係づくりを積み重ねていきたいと思います。

放運動の現状と行末には熱い思いをお持ちで、お会いするといつも「解放新聞」やお送りしている「協会」の機関誌などを手にし、書き込んだメモを見ながら、意見や質問をされるのでした。そうした姿に接するたびに、自分自身の不勉強を恥じ、頭が下がる思いをするのでした。

豊中のことを気にかけてくださり、相談にも乗っていただきました。ブレずに筋を通し、真っ直ぐに物事を見つめる、誠実そのものの人だったと思います。だから、私みたいないい加減な者は、向井さんにお会いする前には、それなりの心の準備をせねばと、いささか緊張もしますが、いざその場になると、何でも言ってしまうから不思議です。まだまだご意見を伺いたいことが山ほどあったのに、もうその機会は訪れないのだと思うと、途

方に暮れてしまいそうになります。

思えば、もう1年以上も会っていなかったことになります。日常の雑事にかまけて、大切なものを忘れていたことに気がつかされ、何ということに…と愕然とするばかりです。もう会うことは叶わないと思うと余計に、私が今抱えている問題について、向井さんの意見を聞きたいと無性に思います。細い目となめらかな口調で、もういっぺん語りかけてほしいと…。向井さんならこんな時、どう考えただろうかと想像をめぐらし、あの日、あの時、あの場所で交わした会話を思い起こしながら、私なりの道をつけていきたいと思います。

向井さん、ありがとうございました。  
安らかにお眠りください。

### 【向井 正さんの略年譜】

- 1939年 3月 大阪市東淀川区で父・岩太郎、母・スエの第九子として生まれる。
- 1945年 6月 空襲の中を避難、大阪市住吉区に移る。
- 1946年 4月 大阪市立長居小学校に入学。
- 1949年 9月 東淀川区に転居。
- 10月 母・スエ死去（48歳）。
- 1952年 4月 大阪市立中島中学校入学。
- 1955年 4月 大阪市立扇町第二商業高校入学。昼間に地元日之出地区で米穀店にアルバイト。
- 1959年 4月 高卒後、就職。夜間に関西経理専門学校に通う。
- 1960年 5月 日之出支部に加盟。
- 1961年 4月 日本共産党に入党。
- 1965年 6月 部落解放同盟大阪府連合会の専従事務局員になる。
- 10月 大阪府連第13回大会において、執行委員になる。
- 1966年 1月 日本共産党より除名。
- 1968年 2月 西田美智子と結婚。

- 1971年 7月 大阪府連第19回大会で教宣部長になる。
- 1972年 3月 部落解放同盟第27回全国大会で中央委員になる。  
6月 大阪府連第20回大会で書記次長になる。
- 1973年 3月 大阪府連第21回大会で組織局長になる。  
11月 父・岩太郎死去（73歳）。
- 1975年 6月 大阪府連第22回大会で書記長になる。
- 1984年 3月 部落解放同盟第49回全国大会で中央執行委員になる。  
4月 大阪府連第31回大会で書記長退任、執行副委員長になる。
- 1985年 4月 中央執行委員会出席のため上京。夕刻に発病、緊急入院。  
9月 大阪府松原市の阪南中央病院に移送される。
- 1986年 2月 阪南中央病院を退院。
- 1987年 4月 大阪市「芦原橋」交差点で横転事故。「富永外科」を経て府立病院に入院。  
6月 部落解放同盟第44回全国大会で中央執行委員を退任。
- 1988年 5月 部落解放生活協同組合理事長になる。
- 1989年 7月 大阪府立病院に教育入院。
- 1990年 3月 大阪府連副執行委員長、専従辞職。  
4月 衆議院議員上田卓三事務所・中企連相談役として専従。  
10月 大阪人権歴史資料館参与になる。
- 1991年 11月 大阪人権歴史資料館理事になる。
- 1992年 11月 左屈曲母指で腱鞘切除手術（府立病院整形外科）。
- 1995年 3月 上田卓三事務所・中企連を退職。  
4月 大阪人権歴史資料館に勤務（常務理事）。
- 1997年 12月 大阪人権博物館長になる。
- 2017年2月26日 逝去（78歳）**

### 【豊中との縁】

- 2004年 11月 第五中学校一年生が「ふれ愛こどもカーニバル」で演じた芝居「野に咲きし花のごとく～寺本知さんの生涯～」で事前に寺本さんの聞き取りをさせていただく。
- 2007年 3月 とよなか人権文化まちづくり協会の「部落問題は今、研究会」で「部落解放運動を見つめ続けて思うこと」として講演。
- 2007年 7月 部落解放同盟豊中支部第41回定期大会で「部落解放運動の組織の再生と運動の前進をめざして」をテーマに記念講演。
- 2013年 10月 「寺本知生誕100年のつどい」で「寺本さんを語る～その出会い、そして導かれて～」と題して記念講演。

分たちの考えを作品の形にすることを認めてくれる空気があった」、「ああいう企画は、今は通らない。ネットを見れば、ちょっと自分と考えの違う人がいるとよってたかって攻撃している。だから テレビでも過剰忖度と自己規制がはびこっている。表現することについては当時より今の方がひどくなっている」と語っている。

記事をとおして、「最近のテレビ番組は中身がなくてつまらない」と言われているが、自分と異なる存在や価値観を一切認めない「他人に不寛容な空気」が様々な部分で悪影響となり、テレビ番組だけでなく、自分たちの社会を結果的により窮屈でつまらないものにしてしまっていることに気づいていかなければならないと思った。

何はともあれ自分が大好きだったセブンのシナリオに込められた平和や非武への想いやメッセージについて知ることができたのはファンとして大変嬉しく思う。

現在、上原氏は「沖縄を舞台とした非武の特撮ヒーロー」を新たに企画しているそうだ。ぜひ、実現されるとともにセブ

ンのような素晴らしい作品になることを期待したい！

なお、この記事では上原氏が手掛けたもう1つのシナリオ、「怪獣使いと少年」についても触れられている。こちらは帰ってきたウルトラマンのシナリオであるが、ウルトラマンシリーズ屈指の問題作としてファンの間では有名である。上原氏によると、関東大震災の朝鮮人虐殺をテーマにしたそうだ。簡単に解説すると、河原でカナヤマという老人（実は善良な宇宙人メイツ星人）と暮らすリョウ少年（地球人）が、近隣住民に襲撃されるといった内容である。作中で語られるリョウ少年とカナヤマとの絆は感動的だが、中学生が「こいつは宇宙人だ」とリョウ少年を徹底的にいじめるシーンや暴走した大人たちが集団でリョウ少年らに襲い掛かるシーンは非常に残酷であり、差別意識が暴走していく怖さがリアルに表現されている。

結末も含めて非常に後味の悪いシナリオではあるが、機会があれば、ぜひ視聴してみしてほしい。

## 豊中地域から

### 保育教育協議会

酒井 留美（事務局）

豊中人権まちづくりセンターこども園、克明小学校、第五中学校、児童館、そして地域とで、2004年から「部落問題を軸に、発信し、交流し、つながる場」

として「保育教育協議会」を結成し、毎年3回(学期ごとに1回)集まる場を持っています。校区に存在する部落問題を、ともに考え、ジブンゴトとして引き受け、



## 理事のページ

### 新たな施策は、丁寧に・具体的に・理解を深める議論を大事に

林 誠子（理事）

「かあちゃん、おれへんねん。ゆうべとうちゃんがなぐって、はだしででていってん。」6歳のY君が体を寄せて耳元でぼそつと言った。ただ抱きしめた。

「とうちゃんが、あのゲームできんように店のゲーム機をトンカチでめちゃくちゃにしたい。」11歳のM君は、そばにきて押し殺した声で怒りを話した。毎日の父ちゃん母ちゃんのこと、母の仕事のことをあふれるように話す彼の眼をじっと見ながらただうなずいて聞いた。

薄暗い近所の喫茶店のテーブルの半数はゲーム機テーブルになっていた。

「先生！さくらをかえてくれーっ！さびし〜んや！」

絶叫のようなうめき声のような絞り出すような声が深夜の受話器からきこえた。兄妹（12歳と6歳）二人を場末のスナックで働いて育てていた。6畳一間にキッチン。壁には夜の仕事で着るドレスがかかっていた。ぜん息の持病があるさくらは、母が働いている夜間にしばしば発作が起こり兄が救急車で病院に付き添っていた。頻繁な発作のため民生委員、役所などのお世話もあり院内学級がある病院に入院することとなった。母と娘が別れて暮らさねばならなくなって数日後の



電話だった。同じ年頃の子どもを持つ私は、嗚咽を噛み殺しながら、「さみしいね、つらいねえ。さくらちゃん少し元気になったら帰ってこれるよ。」を繰り返していた。

「とうちゃんね、新聞のしごとなくなった。すずめとってたべる。きのうばんね、こいをとりにいったの」沖縄のサトウキビ畑の仕事をしていたS君の父は、妻を病気で亡くし大阪にやってきて、新聞配達の仕事で暮らしていた。S君の話聞いた翌日、二人は忽然とアパートから消えた。

今思い出したことは40年近くも前のことばかりである。この間、国際法はどんどん変わり、それに伴い国内法の整備も大きく進んだ。それでも個々の当事者にとっては、まだまだ生きづらい社会である。

今はDVという。当時その言葉はな

かった。夫婦喧嘩といわれた。

今は依存症という。当時、病気という認識はなかった。サラ金・ヤミ金、家庭崩壊へとつながった。

今はシングルマザーという。その頃母子家庭といった。

今はシングルファザーという。その頃父子家庭といった。

シングルマザーの数は増えている。そして多様だ。若年シングルマザー、重い病気を発症したシングルマザーもいる。

DVIは、配偶者間にとどまらず若年交際者間の4割にも広がるという。

依存症への対策は社会的に行き届かないまま経済のために国際賭博場が堂々と行政によって開かれようとしている。「人間にとって」が置き去りにされたまま。

地区として見えにくくなった部落の姿が、部落差別の解消を意味するわけではない。だとすれば、放置することはできない。

しかし、渦中の人間にとって必要なのは、具体的なことである。主義・主張を述べることでもたたかわすことでもない気がする。

私が就職した前後は、部落解放運動が大きな広がりを持つ時代であった。その中で私は空気のように学び、身についたものがいくつもあったと思う。私にとって当たり前の「働く」ということが当たり前でない人々がいるという事実。しかしそれは、「生きるということ」を当



たり前としないに等しい人権侵害であるということもその一つだ。それは、女性・障がい者・外国人・性的少数者などにとっても共通の「人権」課題である。

それにもかかわらず、「私は地区出身者ではないのに、部落問題を課題として扱っているから当事者であるという前提で話す人がいる。失礼です。」という人に直面して、言いようのない部落差別を感じるのである。

差別の解消と人権の確立はできるだけ具体的に語り、実現する方がよいと考えているが頭を抱える。専門家・研究者と自認されている方はどうお考えだろうか。

豊中市においても、住まいに関する地区間い合わせという問題は、今も続く。

私たち市民が新たな行政施策をどう構築し選択するかは、抽象概念で語られてもストンと胸に落ちないこともある。「何がしたいの。」という問い返しはおごりに聞こえたり、なんとか理解して進めようとする議論を封じることのように感じるときがある。わかろうとしているがまだストンと落ちない人への理解を深める努力をせず切り捨てて前に進んでも、客車を切り離して進む機関車のようなものである。何も運んでないに等しい。

「寄り添う」と10回いうより、1回寄り

## 書評

## 『二十歳の原点』 著：高野悦子 新潮社

酒井 留美（事務局）

この本は、2月にNHKでドキュメンタリー『目撃！日本列島「悩んで、もがいて、生きて～私たちの二十歳の原点～』が放映され、それを見ていた人からのリクエストで購入しました。

45年間、若い人たちを中心に読み継がれているもので、1969年に20歳で自殺をした京都の女子大生、高野悦子さんの日記を死後、書籍化したものです。

学園紛争で授業もままならない中、彼女は今一番すべきことは何かについて常に考え、いつも頭の中を描き巡らしていました。

また、顔があまりにも整いすぎていて、完璧そうに見えるのが嫌でメガネをかけたり、様々なことをしてもがいていましたが、大学生活や世間につぶされていきます。

「人間は未熟である。個々の人間のもつ不完全さはいろいろあるにしても、人

間がその不完全さを克服しようとする時点では、それぞれの人間は同じ価値をもつ。そこに生命の発露があるのだ」と20歳の誕生日に書いています。

また「人間は誰でも、独りで生きなければならないと同時に、みんなと生きなければならない。私は『みんなと生きる』ということがよくわからない。みんなが何を考えているのかを考えながら人と接しよう」など、考えさせられるもの、胸をうつものなど、死の2日前まで書き綴っています。

時代はちがっても今の若者に共通する心情があると、読んでみて思いました。



## 新聞切り抜き帖から

## ウルトラセブンのシナリオに込められた 想いを知る！

重本 洋輔（事務局）

円谷プロが生んだ特撮ヒーロー、ウルトラセブンの放映から今年で50年。当時、もちろん僕は生まれおらず、いわゆ

るウルトラマン世代ではないが、昭和のウルトラマンシリーズは再放送やビデオ、DVDなどでほぼ全て制覇した。中でもセ



添う行為を模索し大事にしたい。

協会の理事という立場で書くことは、なかなか難しいことである。

今回もお断りした方がよいかとも思った。しかし、みんな人権や差別、とりわけ部落差別について専門家ではないが、

街づくりを語るとき大事にしてきたことであるし、その理解度や理解の様はいろいろ違っていてもよいのではないかと気を取り直して書かせてもらった。

豊中市の人権行政も新たな施策の選択に向け進もうとしている2017年度である。

## 理事のページ

### 権威主義的になりつつある今の世に思う…

八塚 勇一(理事)

変な世の中になったなと思っていたら、雑誌「世界」2月号に「民主主義の脱定着へ向けた危険」という文章が載っていた。世界価値観調査(世界の様々な国の人々の政治や社会に関する国際調査)1995年から2014年のデータの分析から筆者は、「民主主義が深く定着しているとされる北米や西ヨーロッパ諸国の多数の市民は、自国の政治的リーダーへの批判的な姿勢をただ単に強めたわけではない。より正確に言えば、彼らは政治体制としての民主主義の価値を疑い、自ら行動を起こすことで政策に影響を及ぼせるという希望を失い、民主主義に代わる政治体制として権威主義の支持に前向きになっている。以前と比較し、民主主義の正統性の危機はより多くの指標に亘って現れるのである。」と書いています。

自由な選挙や言論の自由への支持が下がり、「議会や選挙を顧みない強いリーダーが望ましい」「政府よりも専門家に国を代表して物事を決めてほしい」と考

える者が増加し、明らかに非民主的な立場を示す「軍による統治」が「よい」あるいは「とてもよい」と答えた人が一定の割合で増加し続けている。そして、こうした非民主的な見解は、特に富裕層で急速に増加している。その中でも富裕な若者に強まっている。

「多くの市民が熱心に民主主義を支持し、・・・主要な政治勢力が政治的ルールを重んじる世界である時、民主主義が崩壊する可能性は限りなく低い」と書かれているのを読んで今の日本の政治状況を見ていると民主主義を重んじているように思えない。真剣に論争をして問題点を深めるのではなく、ただ単に審議時間を一定費やしたら採決をして決めるという民主主義と無縁の状況にあるように思えます。民主主義を「多数決」としか捉えられない人が議員になっているのだから当たり前かもしれません。この「世界」の号は、「子どもの貧困」が特集で、湯浅誠さんと阿部彩さんの対談が載っています。その対談の最後に湯浅さんは

「日本でも『橋下さんなんてかわいいほうだったね』と思う時代がくるかもしれない。議会制民主主義は存外にあっさり壊れてしまうかもしれないという危機感は、今も持ち続けています」と言って終わっていました。

もう一冊柄谷行人著「憲法の無意識」〈岩波新書〉を読みました。第9条がなぜこれまで維持されてきたのかについての論説です。日本人の無意識によって支持されているので維持され続けているというものです。そして後半はその背景について、世界史的世界経済的な説明です。

「アメリカのヘゲモニーに基づく自由主義的な段階が終わりを告げたのは、1980年代に顕著になったアメリカの産業資本の衰退です。さらに、1990年頃に起こったソ連圏の崩壊。」「この後に生じたのは『帝国主義』の復活なのです。」「そのかわりに、新自由主義といっているのです。資本＝国家は、もはや遠慮容赦なく、労働運動を抑圧し、社会福祉を削減するにいたった。こうして、各国で資本の独裁体制ができあがったのです。」

「私は、憲法9条が日本から消えてしまうことは決してないと思います。たとえ策動によって日本が戦争に突入するようなことになったとしても、そのあげくに憲法9条を取り戻すことになるだけです。高い代償を支払って、ですが。憲法9条は非現実的であるといわれます。だから、リアリスティックに対処する必要があるといつも強調される。しかし、最もリアリスティックなやり方は、憲法9条を掲げ、かつ、それを実行することです。9条を

実行することは、おそらく日本人ができる唯一の普遍的かつ『強力』な行為です。」引用ばかりで申し訳ありません。

最後に最近聞いた東京新聞解説委員の半田滋さんの話です。アメリカのトランプ政権は、朝鮮半島情勢について武力行使も含めて検討していると公言しています。1993年に「北朝鮮」の核開発が問題になったときに、アメリカ政府から日本政府に朝鮮戦争の時と同じように日本を使いたいと打診があったが、政府は憲法9条があるので、できないと明確に拒否をしたので、アメリカ政府は武力行使は断念したことがあったそうです。しかし現在は、戦争法を制定したので拒否ができない状況になっている。今の政府は協力に前のめりだから、アメリカ政府の決断によっては、直接的な攻撃を受ける可能性が高い。ミサイルの攻撃を受けたら、迎撃をする能力は日本には無い。原子力発電所を攻撃されたら、日本は住むことができなくなる。福島第一原発の時も偶然に収まったから、関東は今も住めているが、あのまま進行していたら東京も含めた東日本が人が住めなくなっていたといわれています。

「武力で物事をかたづけようような思考に陥らないようにしないと…」と強く思う今日この頃です。



で、この現実に対してどのように向き合っていくのかが問われているということである。

角岡さんの話は、参加者にありきたりなことを啓発をしたり、考えを押しつるようなところは一切なく、自身の体験や本音も部落の地名も隠すことなくバンバン出していきながらの話であったため、大変聞きやすく、参加者も話に入っていくやすかったように思う。最後まで参加者からの質問や発言が飛び交うなど、ここ数年間でのひゅうまんプラザ講演会の中で最も熱く感じる講演会であり、多くの参加者にとって「部落問題とは何か?」「なぜ部落差別が今もあるのか?」などについて、じっくり考える2時間になったの

ではないだろうか。

個人的には「“部落なんて関係ない”じゃなくて“これから関係を作っていく”」「“部落問題を含めたいろんな問題と関係をつくっていく”“関係者になっていく”」といった言葉がとても印象的だった。

角岡さんが理想とする社会は「部落の人だろうが在日の人だろうが、誰もが自分のルーツについて自由に語れる社会」であり「どんなルーツを持つ人でも差別・排除されない多様な社会」であるそうだ。これについては僕も同じである。まだまだ厳しい状況にあるが、こうした社会を実現できるように、これからも頑張っていきたい。

## 報告 第31回人権啓発研究集会

### リバティおおさか裁判 第8口頭弁論

福島 智子（事務局）

3月24日（金）午後2時から、大阪地方裁判所で、「リバティおおさか裁判 第8口頭弁論」が開かれました。

これまでに7回行われて来た口頭弁論は、大阪市側はリバティ側に、土地・建物を引き渡してほしいという主張で、リバティ側は、これまでの実績は、本来は市が実施すべき展示を市に成り代わって実施してきたとしてきました。リバティ側は、その「公益性」について、昨年施行された「障害者差別解消法」（4月）「ヘイトスピーチ解消法」（6月）「部落差別解消推進法」（12月）について説明し、

そこには教育・啓発の必要性が求められていることが述べられました。しかし、市側は、土地・建物の使用貸借が終了したとし、リバティ側は、占有権限を無くしたことが権利濫用ではないかと訴えています。

それに対して市側は、法律の件で争う気はないし、補助金を出す義務までの法律ではないとし、権利濫用について詳しく説明してほしいので、もう少しまとめて頂ければ反論しやすいなど、約20分という短い時間で終了しました。

終了後の報告集会では、弁護団から



点や考え方で部落問題に取り組んでいる人物で、本講演会のテーマであり、機関誌 52 号（2016 年 7 月）の書評でも取り上げた「ふしぎな部落問題」の他、「ホルモン奉行」や「ピストルと荊冠」「ゆめいらんかね やしきたかじん伝」などの書籍をこれまでに発表している。

講演会では「ふしぎな共同体・被差別部落」と題し、「被差別部落は本来あってはならないはずの存在である」といった話に始まり、「その部落を残してきたのは誰（何）か」、「部落差別をなくすのか、それとも部落や部落出身者をなくすのか」「部落を隠すのか、明らかにするのか」など、他の差別や人権問題にはない部落問題特有の複雑でややこしい部分についての話とともに部落の関係者も運動家も行政も部落外の人も含めた多くの人々が未だに上手く理解・整理できていない部分についての話を聞くことができた。

中でも「差別意識のメインストリーム化」と題したインターネット上における差別状況についての話は、今、我々や部落解放運動が直面している課題につながる話でもあり、大変興味深く感じた。

現在、「差別は恥ずべき行為」や「差別は社会悪」といった考え方が社会に

定着し、かつてのように露骨であからさまな差別行為は少なくなったと言われているが、その一方で、誰もが匿名で本音を語ることができるインターネット上は差別の温床にもなっている。部落問題についてもインターネット上では誤解や偏見も含めた様々な差別情報が氾濫しており、「インターネット版部落地名総鑑」ともいえる情報を堂々と晒す者まで現れている。なにより恐ろしいのは、インターネットの性質上、このような情報を全て消去したり回収することは絶対に不可能であり、本来あってはならない存在であるはずの被差別部落の情報と、その部落に対する差別意識はインターネットをとおして今後もずっと生きていくということだ。

角岡さんはこのような状況に対して、いっそのこと開き直って「ここが部落です！」と自ら晒していくとともに、箕面の北芝支部の取り組みを例に挙げ、部落の特性を生かしたり、部落だからこそできる取り組みを部落外に広めていき、被差別部落に対する人々の意識を変えたり、部落問題への理解につなげていくことを提案した。

この「自ら晒していく」というのは大胆すぎるかもしれないし、決して簡単なことではないだろう。しかし、「どこが部落か」をインターネットをとおして誰もが簡単に知ることができる状況にある中で、それを隠し続ける意味はなくなったとも言える。では、どうすれば良いのか？どうすれば正解なのか？それについては、まだなんとも言えない。今、言えるのは、我々が部落問題の解決を目指していく中

## 評議員のページ

### 相模原障害者殺傷事件に思う！ 山口 博之（評議員）

#### はじめに

昨年7月に津久井やまゆり園にて起こった元職員が施設内の入所者19人を殺害、27人を負傷させた事件は、障害当事者問題のみならず、もっと大きな人口割合を占める高齢者問題にも繋がると私は思っています。

#### 犯人は精神障害者か！

犯人が語った「(障害者は)周囲の重荷・負担になるだけの存在」、他色々ありますが、この考え方は「優生思想」とされる考え方であり、病状では無い事を記しておく。読者の皆さんは専門の精神科医に聞いてほしい。「優生思想を持つ人を治す薬は何か？治療法はあるのか？」と…。

そして犯罪実行の時刻・凶器並びに職員を縛る結束バンドの準備・衆議院議員に出した手紙の内容など、「絶対に病気の症状で無い！」と断言しておきます。

現在、「自己愛性人格障害」となっていますが、これはパーソナリティを表すもので「精神病状」とは別の視点において語られるものです。例えば私はてんかん患者ですが病状は「ひきつけ」「失神」「失禁（おしっこ漏れ）」です。もし病状としての犯罪があるのなら聞きたいくらいです。

障害者の国際組織（DPI日本会議）



は声明の中で、今回の精神保健福祉の見直しについて「立法事実は存在しない」としています。

以前、大阪教育大学附属池田小学校の事件でも、「犯人の詐病」がわかった時に「医療観察法」が作られました。犯人は「精神障害者では無い」にも関わらず…でした。

今、憲法・条約、国内法で「障害者主権」がどの様に守られているか？課題提起が行われています。「精神・知的障害者が客体化されたままでは福祉の前進はありえない」との発言も出ています。こうした議論が活発になっていくことを望みます。

#### 懸念する高齢者問題

最近、上野千鶴子氏が書いていたことですが、70代とおぼしき澆刺とした男性が「80歳以上の重度介護を必要とする老人を処分することはできないか」と発言した。その人は確かに「処分」と言った。「限られた国の予算を効率的に配分

するには、もう、いずれ死ぬことがわかっている重度要介護者に資源配分するのは無駄だ」と…。自分がいずれ80歳になるということも重度の要介護者になる可能性があるということも想像していないのかと…。

介護の効率性としての高齢者施設・介護者から投げ捨てられた事件も虐待も複数の施設で起きています。

### 最後に

この事件を「他人事」と考える人は多いかと思いますが、人口の4分の1を占めるであろう高齢者に「施設と介護」「国家負担としての高齢者」「尊厳死」など、真剣に考えていかなければならない時が来ている様に思います。「命の軽さはそれを他人事とする人たちが促進している」気がします。

## 人権文化のまちづくり講座

# 知っていますか？ 部落差別解消法施行

日時：**5月10**日（水）18:30～20:30

講師：**川口泰司**さん（山口県人権啓発センター）

会場：**豊中人権まちづくりセンター2階**

申込み：当日会場にて受付 定員：50名 費用：無料

問合せ：**06-6841-5300**（協会事務所）

山崎さんからは、愛知県の部落解放運動の歴史とこれまでの部落差別事件や事件に対する取り組みについて、林さんからは、「小学生の時、実父がハンセン病で療養所に入所し、父は死んだと思い込みながら生活してきたことや被差別部落がある地域の学校へ勤務し、地域の人に出会い、部落差別の問題と実父の問題が重なったことで、差別の問題が『自分事』としてとらえられるようになった」といった話を聞きました。

2日目は、セクシャルマイノリティ教職員ネットワークの土肥いつきさん、熊本日日新聞の高峰武さん、弁護士の在間秀和さんの講演に参加しました。

土肥さんは、ご自身も当事者であり、教師生活をする中で、セクシャルリティの問題に取り組み、悩んでいる人のつながりが広まり、子どもたちの交流もできるようになって、当事者だけでなく、支援・サポートする人も参加しながら交流を広げているそうです。

多様な性についての取り組みが、どんどん進んでいることに驚きました。

熊本日日新聞社の高峰さんのお話しは、水俣病 60 年ということで、お話をさせていただきました。正直、水俣病に関し

てはあまり詳しくは学んできていなかったもので、汚染された魚を猫が食べて、猫が死んでいなくなったところから、公害の原因が分かったということを知りました。次年度にはぜひ取り組んでみたい内容だと思いました。

最後は、ヘイトスピーチの問題について、弁護士の在間秀和さんにお話を聞きました。昨年の 6 月に「ヘイトスピーチ解消法」が施行されましたが、これまでの条例や法律ができるまでの経緯や、できてどうなったのか？今後の問題や課題についてのお話でした。

2日間の集会をとおして、様々な人権課題について学ぶことができましたが、一番心に残ったのは、林力さんのお話でした。

ご自身の父親がハンセン病ということで、学校では「くされの子」と言われ、「父は死んだ」と思わされてきたけれども、部落差別の問題との出会いをとおして、ハンセン病に対する差別や偏見があったからそう思わされてきたことに気づき、父のことも隠さず話ができるようになったとお話しされていたことが、自分のことと重なり印象的でした。

## 報告 ひゅうまんプラザ講演会

### ふしぎな部落問題

重本 洋輔（事務局）

2月17日の金曜日、豊中市立中央公民館にて、フリーライターの角岡伸彦さんを講師にお招きし、「2016年度ひゅ

うまんプラザ講演会・ふしぎな部落問題」がおこなわれた。

角岡さんは部落解放同盟とは違った視

ろ、横綱の方が頭から土俵の外に飛び出してゆきました。なんと自身初の金星を挙げたのです。これは年6場所制になった1958年以降に初土俵を踏んだ力士のなかでは2番目の年長記録です。「自分の人生で今が一番いいかもしれないですね。」取組後に彼はこうコメントしました。注1)

とはいえ、上位総当たりの番付にある今場所を通じては4勝11敗と大きく負け越してしまいました。そのなかには土俵際で踏みとどまったつもりが、わずかに指先が出てしまったというまことに惜しい取り組みもありました。残念ながら来場所は番付が下がってしまいますが、三役(※関脇と小結のこと)を目指して再びは上がってきてほしいと思います。蒼国来関には「不撓不屈」の言葉がよく似合います。

今場所は新横綱の稀勢の里関が、13日目の日馬富士戦で左肩を負傷したに

もかわらず、千秋楽に大関照ノ富士関に本割と優勝決定戦で連勝して、先場所に続いて連覇を達成するという大変劇的な幕切れとなりました。



それに比べれば、蒼国来関の初金星はごく目立たないエピソードの一つかもしれませんが、わがまちに彼のような隠れたヒーローが毎年やってくることを、ぜひ覚えておいてほしいと思います。

さて最後になりましたが、今後とも陰ながら荒汐部屋と蒼国来関を応援してゆきたいと思います。ぜひ読者の皆様も応援よろしくお願いします。

【注】1) 2017年3月15日(水)

朝日新聞 朝刊

## 報告 第31回人権啓発研究集会

### 人権啓発研究集会 in 名古屋

福島 智子(事務局)

2月2日～3日、名古屋国際会議場にて第31回人権啓発研究集会が開催されました。

1日目の全体会では、はじめに主催者を代表して(一社)部落解放・人権研究所代表の奥田均さんから挨拶がありました。奥田さんは挨拶の中で部落差別解消推進法の施行について触れていましたが、「部落差別の存在を認知した

ことが重要で、これからどう活用して行くか?計画を立てながら、法律の周知を進め、知ってもらうことが必要。『知られない権利』は守られない」と話されたことが印象的でした。

全体会では、記念講演として、部落解放同盟愛知県連合会の山崎鈴子さんと、「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟原告団長の林力さんの話を聞きました。

## 楽遊ガイド

# 蒼国来関！おめでとう！！初金星！！

玉置 好徳（理事）

春とはいえ、まだ朝晩は肌寒い今日この頃ですが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

さて、今回もネタ探しで四苦八苦しておりましたが、ぜひお知らせしたいニュースが見つかりました。

当コラムで以前に、蒼国来 栄吉（そうこくらい えいきち）関（※以下では「蒼国来関」と呼ぶ。）をご紹介したのを覚えていますか。

毎年大相撲三月場所（大阪場所）が開催される期間に、阪急電鉄の豊中駅近くにある豊中稲荷神社の境内にカラフルな「のぼり」が立ちます。その間に「荒汐部屋」が同神社に宿舎を構えています。荒汐部屋は、荒汐親方（元小結の大豊（おおゆたか））が、2002（平成14）年6月に中央区日本橋浜町に開いた相撲部屋です。現在の筆頭は、東前頭2枚目（三月場所現在）の蒼国来関です。

彼は、1984年1月生まれの現在33歳、出身は中国内モンゴル自治区赤峰市です。初土俵は2003（平成15）年九月場所、初入幕は2010（平成22）年九月場所で、初の中国人幕内力士です。また、日本語がととても堪能で、早稲田大学で「日本語の学び方」について講

義したこともあります。

けれども、これまでの道のりは決して平坦ではありませんでした。2011（平成23）年の大相撲八百長事件では、特別委員会から八百長に関与したと認定されて、日本大相撲協会から引退勧告処分を受け、これに応じなかったため解雇されました。しかし、これを不服として東京地方裁判所に同協会に対する地位保全の訴訟を起こし、2013（平成25）年3月に下された判決で解雇は無効とされ、ようやく相撲界に復帰することができました。

とはいえ、2年のブランクを取り戻すのは容易ではなかったと思いますが、今年の初場所（一月場所）では東前頭11枚目で12勝3敗と大きく勝ち越して、初の三賞となる技能賞も受賞しました。

3月12日（日）～26日（日）の15日間「エディオンアリーナ大阪」（大阪府立体育館）で開催された今場所は、自己最高位の東前頭2枚目で土俵に臨みました。そして、3日目の14日（火）に初の結びの一番で横綱日馬富士（はるまふじ）と対戦しました。ところが、横綱に一方的に攻め込まれて土俵際に追い込まれ、もう万事休すかと思われた瞬間、一か八かのはたき込みを放ったとこ